

# 教会月報

No.530 (2023年2月26日)  
【2023年3月号】  
日本キリスト教団埼玉和光教会  
〒351-0114 和光市本町 15-50

## 「喜び」の秘訣

岩河敏宏

フィリピの信徒への手紙 4 章 4 節～7 節 (新改訳)  
4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。(中略) 6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

2月19日の主日礼拝後に2020年以来、コロナ禍の影響で休止していたジョイントコンサートを開催できました。出演グループは、埼玉和光教会聖歌隊、C1ハイツさわやか会男性コーラス隊、ジョイシスターズ、ハンドベルサークルの4グループでした。各グループの奏でる歌声や音色が礼拝堂で一体となり、聴衆の心で調和することで生まれる心地良い時が創り出され、表現し難い「喜び」を感じました。この感情は、人が意図的に計算する恣意的な演出からは生まれません。出演者が、現状での最善を尽くそうとする姿勢だけが前面に出るのではなく、面前に在る幼い聴者への想いが醸し出すユーモア(遊び心)が、聴く者に和みを誘います。この相互作用の中で、「喜び」が生まれたのだと感じています。

さて、冒頭に紹介したフィリピの信徒への手紙は、

繰り返し「喜ぶ」ことを勧めていることから、「喜びの手紙」と評されることがあります。でも、私たちは、「喜びなさい」と勧められて、「はい。」と単純には言えない現に生きています。それに「喜び」の感情は、「喜べ」と言われても根拠や理由が必要で、それなしに喜ぶことはできません。著者のパウロは、私たちの現実には思い煩いはあるが、それらを含めて「神に知ってもらいなさい」(6節)と勧めています。ということは、現実には(私たちもそうですが)自身の思い煩いを神が知ったところで何の解決にもならない、として神との繋がりに距離を置いている私たちの姿勢に対して、パウロはそんな人の心を砕きたいという気持ちがあることをうかがわせています。この手紙を記した時、彼は獄中生活を強いられて(1章12節～13節)、とても喜べる状況ではないと私たちは感じますが、彼は心から「喜び」を勧めています。その根拠はどこにあるのでしょうか。

様々な問題を抱えつつも、目の前に居る人に心を寄せて誠実を少しの遊び心を織り交ぜ、自身が成す業を行おうとする時、「人のすべての考えにまさる(人知を超える)神の平安が」(7節)働いて、ある考えに囚われている私の考えが解放されて、種々の課題はあるが、それでもキリスト・イエスにあって守られている、との「喜び」が在ることを感じたい。

